

2012年度 宮城厚生協会辞令交付式 83名のフレッシュな仲間を迎える



2012年度辞令交付式 (坂総合病院セミナー室)

厚生協会だより

2012年5月21日
第 313 号

発行
(財)宮城厚生協会

〒985-0835
宮城県多賀城市下馬
二丁目13番7号
TEL 022-361-1113
FAX 022-361-1124
発行人: 長 澤 清 光

4月2日(月)、坂総合病院セミナー室において

理事長あいさつ

宮城厚生協会理事長

水戸部 秀 利



新入職員のみなさん、入職おめでとうございます。宮城厚生協会を代表して、みなさんを心から歓迎します。

1年前の
「顔合わせ会」

1年前は、この部屋(セミナー室)は東日本大震災の対策本部となっていました。坂総合病院は地域の「防災

「2012年度宮城厚生協会辞令交付式」が執り行われました。今年度は新規採用として83名のフレッシュな仲間を迎えました。

水戸部秀利理事長と新入職員代表の大木碧看護師のあいさつを一部割愛し紹介します。

医療センター」になっていきます。私たち職員と、全国から支援に駆けつけてくれた民医連のたくさんの仲間が、時々刻々ここで打ち合わせをしながら、被災者の受け入れや、避難所訪問など、夜昼なく震災後の救援活動をしていました。

昨年は、辞令交付式もできず、支援者の宿泊所になっていたクリニック1号館8階を臨時会場にして、犠牲者への黙祷の後、「顔合わせ会」を行いました。

そのとき、新入職員代表であいさつされた看護師の伊藤佳菜さんの話は印象的でした。

彼女は石巻の学校で被災し、仙台荒浜の実家も流されました。『たくさんの辛い・

悲しい・苦しい思いをしたからこそ、そういう思いを受け止め、笑顔を届けられる看護師になりたい』と涙ながらに決意を述べました。その言葉を私自身、強く励まされたのを覚えています。

あれから1年余り経ちました。みなさんにとっても、いろんな意味で濃厚な1年だったと思います。

津波の被災地から一歩離れたように見えますが、海岸沿いは、瓦礫がようやく脇に寄せられ、被災者は劣悪な仮設住宅で不自由な生活を強いられています。将来の生活・生業の見通しも立っていません。本格的な復旧・復興は、まさにこれからの課題です。

私たちの
基本姿勢

私たち宮城厚生協会の医療や介護活動の基本姿勢は、「患者さんや利用者さんの立場に立つ医療や介護」具体的には、「病氣・障害だけをみるのではなく、それぞれの置かれている社会的背景をしっかりとみつめ、その中で問題を一緒に解



決する」。これは、創立以来62年、宮城厚生協会の一貫した活動理念です。

これからの5年10年の長い復旧・復興活動の中で、この理念をより鮮明にしていこうとが大切だと思っています。「被災者に寄り添い、被災者の困難を共有しながら一緒に困難を解決しよう」、この姿勢をぜひ皆さんにお願いしたい。

と思います。

この1年間、各事業所や職場で、避難所や被災地・仮設住宅を訪問し、支援物資を届け、友の会班会・健康相談会や、工夫を凝らした「縁日」の催しなど、多彩な活動をしてきました。これからも支援活動は続けていきます。みなさんも是非参加してください。

このような活動は、決して一方的に寄り添い支援するというものではありません。むしろ励まされることも多々あります。

昨年6月、ある小さな漁港で船も作業場も養殖イケスも全て流された漁師さんに会うことがありましたが、養殖のイケスを作りながら、「もっていかけたものは、海からトッカイス」という漁師魂、激しい意気込みに触れ、その逞しさに、私自身が大変元気づけられたものです。

復旧・復興を

妨げるもの

もう一つは、被災者が、懸命に立ち上がろうとするときに、それを妨げるもの、そのような動きに注目し考えてほしいということです。

一つ目は消費税増税です。

結果的に、低所得者ほど負担が重くなる、最も不公平な税金です。多くの被災者は収入の道も閉ざされています。とても許せません。

二つ目はTPP（環太平洋連携協定）です。被災地の農業や漁業を復旧しようとする

ときに、関税をなくして、またともに海外との競争にさらしたら、とても復旧などできません。

三つ目が原発再稼働です。

福島県の惨状は言うまでもありませんが、宮城県も丸森など南部を中心に汚染されました。女川原発も事故になる一歩手前でした。放射能問題で瓦礫処理もなかなか進みません。このような中で原発再稼働などは、復旧の大前提である安全そのものを脅かすものであり、とても許すわけにはいきません。

こういう復旧を妨げる政治のあり方を、皆さんも考え、一緒に声を上げていっていただきたいと思っています。

無差別

平等の医療

38年前、私が民医連に入職したのは、「無差別平等の医療」、その根幹になる「ヒューマニズム、自分だけでなく他者をも大事にする」気持ちに共感したからです。

「人間を大事にしたい」という思いはみなさんも同じだと思います。

しかし、最近の日本や世界の流れをみるとき、自己責任や競争原理、市場主義・グローバリズムが吹き荒れ、戦争や殺戮は絶えず、国内でも格差や貧困の広がり、保険証を取り上げられ手遅れで亡くなる、「孤独死・孤立死」など、そのようなおぞましい現実がたくさんあります。私たち人類は、絆や分かち合いによって、本当に豊かになる方向に発展できるのか？と時には不安になり、気持ちが揺らぎ、折れたりすることがあります。

しかし、今回の大震災で、全国から駆けつけてくれた民医連はじめ多くの仲間の献身的な支援を目の当たりにし、その不安も吹き飛びました。

今回の震災では、復旧・復興を自己責任としたり、消費税のように格差を是認拡大する、TPPのように競争原理を押し付けるような流れが確かにあります。

しかしこのような流れに逆らい、社会のあり方を絆や分かち合いをより豊かに発展させる方向に切り替えていく、原発をなくし安全な未来を創

ろうとする輪も段々広がりつつあります。これが人類の正しい歴史の方向だと思えます。このことに確信を持って、未来を押し上げる若い皆さんの活躍を大いに期待しています。

「公益」にふさわしい 事業体めざす

最後に、法人の事情ですが、公益法人制度も変わる中で、今年は、私たち財団法人宮城厚生協会も正式に公益法人に移行するための申請手続きに入ります。

「無差別平等の医療や介護」を掲げ、差額ベッド料も徴収せずに、経済的に困難な場合は「無料低額診療」を実践し、震災からの復旧・復興の中で、被災地、被災者の立場に立ち、名実ともに「公益」にふさわしい事業体をめざしていきたいと考えています。

みなさんと一緒に、地域に信頼される医療や福祉の事業体を築いていきたいと思えます。以上で、みなさんへの期待と歓迎のあいさつといたします。

2012年度宮城厚生協会辞令交付式 新入職員代表あいさつ

一つ一つの経験を糧に一歩ずつ 確実に成長していきたい

坂総合病院9階病棟看護師 大木 碧

希望という若葉が芽吹くこのよき日に、宮城厚生協会に入職できることを、大変喜ばしく思うとともに、私たちは新たな決意をしております。

地域とのつながりや チーム医療の大切さ知る

昨年は、東日本大震災という未曾有の大災害に見舞われ、各病院とも被災地でありながら、たくさんの被災者の治療やケアにあたり、第一線で活躍している姿がたいへん印象的でした。平素より地域や患者様に寄り添い、緊急時を想定した訓練を行ってきたからこそ、震災に迅速に対応でき

たのだと感じると同時に、地域や被災地に貢献できる医療者に自分もなりたいと強く思いました。また、他県より応援に駆けつけて下さった方々と連携した支援の様子を聞き、近隣だけではなく、他の地域とのつながりやチーム医療の大切さも知りました。

このような環境で 働きたい

私は、高校生の頃より看護体験に参加させていただき、大学へ進学してからは奨学生として看護体験や学習会、インターンシップなどに参加させていただいております。実際に病院での医療や看護を目の当たりにし、患者様に

寄り添い、生活に根ざした医療・看護を提供していることを実感しました。さらに、学生の質問に丁寧に応じて下さったことや、新人への指導の様子、キャリアアッププログラムに沿った充実した研修体制などから、職員一人一人を尊重していることが分かり、このような環境で働きたいという思いも強くなりました。

医療者として 貢献できる人材に

学生生活が終わり、実際に病棟で働く時が近づいている今、新たな生活や「看護師として働く」という夢の実現で希望に満ちている一方、自分に看護師という仕事が進むのか、一人前の医療者になれるのかという不安もあります。この先、迷うことがあってもいいかもしれません。失敗もあるかも知れませんが、迷

うことを恐れず、時には先輩方の力をお借りしながら、一つ一つの経験を糧として一歩ずつ確実に成長していきたいと思えます。本日この場に集まった新入職員83名。宮城厚生協会の一員として働くことを誇りに思いつつ、一社会人としての自覚と責任を持ち、諸先輩方のご指導を受け、一刻も早く医療者として貢献できる人材となるよう努力してまいります。



あいさつする大木碧看護師

『みちのく総合診療医学センター』

設立記念式典開催

フロンティアになろう！

3月31日(土)にホテルメトロポリタン仙台で、100名以上の方が出席し「みちのく総合診療医学センター」設立記念式典が開催されました。

●第一部

記念式典

◆院長あいさつ

はじめに、坂総合病院今田隆一院長があいさつ。大震災後の医療状況にふれ、「医療



あいさつする今田院長

過疎」から「医療空白」になってきたと指摘し、早急に病院・クリニックの復旧・復興が求められていると強調。「地域のニーズに応えられるよう病院の総合力が求められる中、『みちのく総合診療医学センター』(以下「センター」)の役割は非常に大きい。」と述べました。

◆「センター」概要説明

小幡篤センター長より「センター」設立に至る経過、目的、概要、役割、研修施設やフィールド、各研修コース、体制など報告されました。

◆「センター」への期待

「センター」アドバイザーの藤沼康樹先生(日本プライマリ・ケア連合学会理事)が『東北への貢献が何かできないか考えていた。命名に「み

ちのく」が入っていて東北全体とつながろうという意志がうかがえ感銘した。ともに地域医療改善ミッションに關わっていききたい。』と述べられました。

◆来賓祝辞

伴信太郎先生(名古屋大学医学総合診療科教授)と藤末衛先生(全日本民医連会長)から祝辞をいただきました。

伴先生は、シエネラリスト育成のためには「多様性」「柔軟性」「総合性」が重要であるとして、『日本は日本式』さらに、坂は柔軟に坂式を追究していくことが大事。医療職だけでなく地域と連携しながら新しい取り組みを展開してほしい。』と述べられました。

藤末先生は、大震災発生後、坂病院に駆けつけての感謝を述べ、『ゼビ「架け橋」としてミッションをつなぎながら、民医連以外にも大いに連携を強め取り組んでいただきたい。』と述べられました。

◆第一期生紹介

第一期生の本郷舞依医師と

隅田英憲医師から、自己紹介と決意、なぜ総合診療を選んだのか、家庭医をめざすのかなど報告がありました。



左から、小幡医師(センター長)、児玉医師、隅田医師(第一期生)、本郷医師(第一期生)、内藤医師(管理部担当)、佐々木医師(副センター長)

記念講演

テーマ:「東北のシエネラリスト」

講師: 前沢政次先生(日本プライマリ・ケア連合学会理事長)



記念講演の前沢先生(左)と座長の徳田先生(右)

こういう医師を育ててほしい、育ててほしいと思っていると、プライマリ・ケアの意義や医師の役割について述べられました。そして、『求められる医師は、コミュニケーションのエキスパートであり、全体把握力・先見力(社会に対する眼力を持ち準備できる医師)であり、医療の不平等を是正していくことである。』と述べられました。

●第二部

オフサイト
ミーティング
ワールド・カフェ

ワールド・カフェの様子

テーマは「東北に必要なシエネラリストはどんな医師か?そしてシエネラリストを

どう育て、どう増やしたらいいのか?」出席者は12のテーブルに分れそれぞれの想いを語り合いました。

◇閉会のあいさつ

内藤孝副院長があいさつ。
『この地域に大きく花開くよう今後ともご指導・ご協力のほどよろしく願います。』と述べ閉会しました。

「宮城厚生協会職責者のための学習会」開催

「職場での精神健康管理活動の推進」

「健康で働き続けるために」

協会安全衛生委員（復職支援準備室） 鈴木 悦代

3月17日（土）午後、坂総合クリニック一号館8階会議室で、広瀬俊雄先生（仙台錦町診療所所長・産業医学センター所長）をお迎えし、昨年の第二弾として標記テーマで学習会を開催し、みやぎ保健企画も含めて38名が参加しました。

学習会の意義・目的

メンタルヘルス対策は、この事業所においても課題であり、厚生協会では2007年「心の健康づくり計画」を策定、翌年復職支援準備室が



5つの班に分かれてグループワーク

設置されました。この間の取り組みで、復職支援がシステム化された仕組みの中で進め



各班から2名ずつ代表してのディベート

ディベートおよびワークシヨップで事例検討

職場復帰に関しては、主治医の指示だけで、現場での復帰が自然に進む例ばかりではないのが実際。そうした事例を基にディベートとワークシヨップを行いました。

られるようになり、また、職場から早期に相談もされるようになってきています。
今回の学習会は、これまでの経験を共有しながら、更なるメンタルヘルス対策を前進させる課題について、共通言語にしていこうという問題意識がありました。

ディベートⅠ

「まずは診断書に沿って働いてもらう」VS「現場の実情に合わない。現場に即した診断書を」

ディベートⅡ

「メンタル障害に甘い評価は禁物。他疾患と余り区別はしない」VS「メンタル障害はその人だけの責任でもない。職場環境改善もしないままに厳しい対応は次の患者を生む」

初めての方法で戸惑いがあつたりしつつも、双方真剣に取り組まれ、新たな気づきが生まれ、「職責者の認識をどう進めるか」について、確認できた内容でした。

広瀬先生から講評



広瀬先生

ディベート、ワークシヨップ後、広瀬先生から講評があ

りました。そこでは、近年見出されている「現代型うつ」や「双極性障害」について、画一的な休業期間や復職規定は既に合わなくなっている事にも触られました。病状の性格等の知識を深めて、状況に見合った働き方、適切な対処の仕方を向上させていく課題が確認されました。

感想や今後の希望

* 初めての方法でとまどったところもあったが、様々な考え方を出すことで、「良い判断」に近づけることがわかった。

* 人の立場に立った考え方ができる訓練になった。職場でのディスカッションの方法に取り入れていきたい
* 病気の知識や適切な対処について、もっと詳しく聞きたい。

* メンタルに悩む人がでない職場づくりに貢献したい。等々。

労働安全衛生委員会では、今後も定期的に学習を継続しながら、「健康で働き続けられる職場づくり」に取り組んでいきます。

カナダ新婚旅行

エッセイ
さわやか

～夫婦の野望“オーロラ観測”～

長町病院理学療法士 遠藤 丈晴

3夜連続の観測

結婚式から3か月が経つ2012年1月20日。私たち夫婦の野望“オーロラ観測”を行うべくナイアガラ、イエローナイフ7日間の新婚旅行に行ってきました。

成田から飛行機で13時間かけてカナダ東部のトロント空港に到着。ナイアガラフォールズ市にバスで移動し、カジノや夜のナイアガラ観光を行いそのまま一泊。翌日は朝からナイアガラの滝観光でした。外の気温はマイナス7℃、冬のナイアガラはオフシーズンで観光客の姿はまばらでした。滝の水量も少ないとのことですが、十分な迫力、その水しぶきは滝よりも高

く霧状になり噴煙のように上空まで昇っていました。風向きでその霧が来ると服がたちまち凍結し、カピカピになってしまい、周りも樹氷状態でした。

翌朝は、またまた飛行機でカナダ西部のエドモントン国際空港へ。そこでまたまた飛行機を乗り換えイエローナイフ空港へ。トータル約7時間の移動(汗)。その日の夜からついに3夜連続のオーロラ観測の始まりです。

神秘的な光景

20時にロービーに集合しバスでオーロラビレッジという観測施設へ移動。外はマイナス20度の世界。バスの窓も結露しつつ凍っていく…、何とか溶かしながら外を見ていると空にはボウ〜と霧のような白い光のようなもの…《オーロラ》です。この日のオーロラは現地でも比較的大きいものだったらしく、施設紹介もままならないままに観測開始。肉眼で見るオーロラは比較的地味なものでしたが、白や緑のカーテンが揺らぐ様子や移り変わる様子など非常に神秘的な光景でした。

オーロラの語源

よくテレビなどでみるオーロラは、いいカメラで撮影しているため鮮やかな色合いが撮れるとのこと。ちなみに私が持っていたデジカメでは残念ながら良い写真は撮影できませんでした。いいカメラを買って行くべきでした(泣)

その後、2日間は残念ながら曇りで観測はできませんでした。

オーロラの語源は神話の暗闇を切り裂く“暁の女神アウロラ”。



去年はとてもつらい出来事がたくさん起きましたが、この光が新しい未来を切り開く光に見えたような気がしました。(ちなみに写真は現地スタッフがいいカメラで撮影したものです)